



表一 御製詩文における植物の調査

No.	植物名	学名	生活娯楽		遊覧鑑賞		宗教祭祀		政治祝典		総計	
			N	G	N	G	N	G	N	G	N	G
1	松(マツ)	<i>Pinus</i>	55	9	21	10	3	3	1	1	80	23
2	竹(タケ)	<i>Bambuseae</i>	23	10	32	12	1	1	-	-	56	23
3	柳(ヤナギ)	<i>Salix</i>	27	6	17	7	4	3	-	-	48	16
4	禾穀(カコク)	<i>Poaceae</i>	-	-	37	8	-	-	-	-	37	8
5	桃(モモ)	<i>Prunus persica</i>	21	4	7	5	1	1	-	-	29	10
6	蓮(ハス)	<i>Nelumbo nucifera</i>	15	5	8	5	1	1	-	-	24	11
7	玉蘭(モクレン)	<i>Magnolia denudata</i>	20	1	4	1	-	-	-	-	24	2
8	梅(ウメ)	<i>Prunus mume</i>	7	5	4	3	-	-	-	-	11	8
9	牡丹(ボタン)	<i>Paeonia suffruticosa</i>	-	-	10	1	-	-	-	-	10	1
10	蕨瓜(ヤサイとウリ)	なし	-	-	8	1	-	-	-	-	8	1
11	杏(アンズ)	<i>Prunus armeniaca</i>	1	1	5	2	1	1	-	-	7	4
12	青桐(アオギリ)	<i>Firmiana simplex</i>	3	2	3	2	1	1	-	-	7	5
13	桑(クワ)	<i>Morus alba L.</i>	-	-	6	3	-	-	-	-	6	3
14	柏(コノテガシワ)	<i>Platycladus orientalis</i>	3	3	1	1	1	1	-	-	5	5
15	菊(キク)	<i>Chrysanthemum</i>	2	2	2	2	-	-	-	-	4	4
16	楓(カエデ)	<i>Acer</i>	4	3	-	-	-	-	-	-	4	3
17	芭蕉(バショウ)	<i>Musa basjoo</i>	1	1	2	2	1	1	-	-	4	4
18	李(サモモ)	<i>Prunus salicina</i>	-	-	3	3	-	-	-	-	3	3
19	紫藤(シナヅジ)	<i>Wisteria sinensis</i>	2	2	-	-	1	1	-	-	3	3
20	槐(エンジュ)	<i>Styphnolobium japonicum</i>	1	1	-	-	1	1	-	-	2	2
21	海棠(カイドウ)	<i>Malus halliana</i>	1	1	1	1	-	-	-	-	2	2
22	榆(ニレ)	<i>Ulmus pumila L.</i>	-	-	2	1	-	-	-	-	2	1
23	桂(カツラ)	<i>Osmanthus fragrans</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
24	石榴(ザクロ)	<i>Punica granatum</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
25	楸(トウキササゲ)	<i>Catalpa bungei</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
26	葡萄(ブドウ)	<i>Vitis spp.</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1

詩文	I	詩文	I	詩文	I	詩文	I
清 六月十九日閑宴 下 確之閑松 柳 柳吟松堂 吟 吟松堂	No.3(九州清宴)	菜 菜見 花 花見 園 園遊 遊 遊覧 覧 覧賞 賞 賞空間	No.9(杏花春頌)	清 清明 明 清明 遊 遊覧 覧 覧賞 賞 賞空間	No.18(鴻慈永祐)	宗 宗教 教 祭祀 祭 祭祀 祀 祭祀 祭 祭祀空間	
植物: 松 NY: 1 GY: 1	植物: 松 NY: 1 GY: 1	植物: 蕨瓜 NY: 1 GY: 1	植物: 柳 NY: 1 GY: 1	植物: 桃 NY: 1 GY: 1			

注: N: 記録回数 G: 御製詩文に該当する植物を記録された庭園の数 T: 詩文の題目  
蕨瓜はヤサイとウリの総称であるため、学名はない。詩文の例は一部の原文だけを示す。

表二 明清時代における植物の花ことば

No.	植物名	花ことば	No.	植物名	花ことば
1	松 マツ	花強くそびえ立ち青く、寒さに強く、逆境に妥協しない君子の人格と比喩される。つねに緑を保っており、寿命が長い。『長壽永固』という寓意をもつ。節節を思わせ緑を存す。節々中空の特徴から、君子の節操と虚心な人格に比喩され、高士化身とみなされる。	11	杏 アンズ	『清明』という詩文では、杏の花が咲いている村が描写され、江南の田園風景という意味が派生する。
2	竹 タケ	生命力が強く、春の象徴である。『留』と同音であるため、古人が友人を送別する時、柳の枝を折って友人に送り、「引き留める」という意味をもっている。	12	青桐 アオギリ	伝説では、古代の靈鳥とされる鳳凰は梧桐の木にしかとまらなから、青桐は富貴の象徴とみなされる。
3	柳 ヤナギ	葉・種などのイネ科の農作物である。	13	桑 クワ	葉をカイコを育てる蠶士の樹である。『桑麻、農桑』などの農業生産の意味をもつことばが派生する。
4	禾穀 カコク	『陶淵明詩』と呼ばれる陶淵明の詩文には、桃の木が武陵源に多く植えられており、後人が俗世間から離れた安楽な世界を「世外源」や「桃源郷」と称される。泥沼の中から生えるが泥に染まらず清い水に洗われて咲く。仏教で知恵と吉祥知恵の象徴である。蓮根は切れても糸はつなぐため、男女の間の愛情にたとえる。	14	柏 コノテガシワ	『菊を束る東籬の下 悠然として南山を見る』という題詩文から、菊は「花之隠逸」と呼ばれる。
5	桃 モモ	「玉石」の「玉」と同じであるため、「貴重、高貴」の意味をもち、権勢を誇り富貴を極める象徴となる。	15	菊 キク	『菊を束る東籬の下 悠然として南山を見る』という題詩文から、菊は「花之隠逸」と呼ばれる。
6	蓮 ハス	「梅花の香りは厳しい寒さから生まれるものである」という語があり、「気品、高潔、忍耐」と象徴する。	19	紫藤 シナヅジ	古代には宮に宮位と関連され、縁起のよい樹とみなされ、「門前の藤は玉を招き、金財が入る」と言われる。
7	玉蘭 モクレン	「梅花の香りは厳しい寒さから生まれるものである」という語があり、「気品、高潔、忍耐」と象徴する。	20	槐 エンジュ	「花の中の神仙」と「富貴の花」と称される。「子孫繁盛」「家族が栄えたと時にめでたき」とも言われる。
8	梅 ウメ	「梅花の香りは厳しい寒さから生まれるものである」という語があり、「気品、高潔、忍耐」と象徴する。	21	海棠 カイドウ	「花の中の神仙」と「富貴の花」と称される。「子孫繁盛」「家族が栄えたと時にめでたき」とも言われる。
9	牡丹 ボタン	「古来より「花の王様」と呼ばれ、宋羅崇華のシシボルとして上流階級の人々が変わる花である。	23	桂 カツラ	花は真っ赤に咲き、実の中に種が多数あるため、子孫繁盛、豊穡のシンボルとされる。
10	蕨瓜 ヤサイとウリ	一般的な野菜やウリなどの農作物である。	24	石榴 ザクロ	花は真っ赤に咲き、実の中に種が多数あるため、子孫繁盛、豊穡のシンボルとされる。

注: 番号は表一に参照する。  
No.16(楓)、No.17(芭蕉)、No.18(李)、No.22(槐)、No.25(桐)、No.26(葡萄)は花ことばがない。

### 3. 御製詩文における植物と植物の花ことばの分類

#### (1) 御製詩文における植物

257編の御製詩文には、26種の植物<sup>注1)</sup>が全部で380回記録されている(表一)。松・竹・柳の記録回数が最も多く、それぞれ80回・56回・48回であり、その次は禾穀(37回)・桃(29回)・蓮(24回)・玉蘭(24回)である。梅と牡丹は11回と10回と比較的少なく、他の植物の記録回数は10回以下である。各植物が記録されている庭園の数をみると、松と竹は23カ所と最も多い。次に多いのは柳(16カ所)・蓮(11カ所)・桃(10カ所)であり、その他の植物は10カ所に足りない。

#### (2) 植物の花ことばと分類

明清時代の花ことばについて記述している代表的な本の『花卉文化与園林觀賞』<sup>23)</sup>と清時代の園芸論書の『花鏡』<sup>24)</sup>に基づき、明清時代における植物の主となる花ことばをまとめた(表二)。複数の植物は類似した文化的な意味をもつことがわかる。松と竹は寒中にも色褪せず、また梅は寒中に花開き、「高潔・節操」という君子の徳行を表現するものと認識される。桃と菊は「隠逸詩人」と呼ばれる陶淵明の詩文から、「俗世を避ける」という隠棲の意味を備える。玉蘭・海棠・牡丹・桂・青桐・槐・石榴はすべて「富貴」という意味をもつ。また、桑・杏・禾穀・蕨瓜は農作物や郷土の樹木であるが、御製詩文に多数現れているため、本研究はこれらの植物を同じ種類にまとめる。その他の植物はおおよそ花ことばがなく(李・楓・芭蕉・榆・楸・葡萄)、あるいは空間造営上にその花ことばの文化的な影響が弱い(柳・蓮・紫藤)<sup>注2)</sup>。以上より、26種の植物は「徳行」(松・竹・柏・梅)、「隠棲」(桃・菊)、「富貴」(玉蘭・海棠・牡丹・桂・青桐・槐・石榴)、「農作」(桑・杏・禾穀・蕨瓜)と「その他」の5種類に分けられる<sup>注3)</sup>。

### 4. 植物の花ことばからみた庭園空間の特徴

使用目的によって、庭園内に造営すべき境地在り異なり、各造園要素の配置も異なっている。従って、本研究は各機能を持つ庭園の詩文における植物を整理し(表一3、図一2)、詩文に描写されている植物景観のイメージとその空間の構成を解明し(図一3)、空間造営上に植物の役割と文化的な影響を分析し考察する。

#### (1) 生活娯楽空間

17カ所の生活娯楽の庭園における御製詩文には、20種の植物が190回記録されている。そのうち「徳行」という意味をもつ植物(88回)は最も多く、「隠棲」(23回)と「富貴」(27回)はおおよそ同じであり、「農作」はほぼ記録がない(表一3)。

「徳行」を寓意する植物において、松(55回)と竹(23回)が主体であり(図一2)、それぞれ数十カ所の庭園の詩文に記録されている。生活娯楽空間には、松と竹は広く植えられ、庭園空間

表-3 植物の花ことばからみた庭園空間の特徴

庭園空間	数量	徳行			隠棲		富貴		農作			その他	総計							
		松	竹	桃	玉蘭	牡丹	松	竹	松	杏	禾			葦						
生活娯楽	55	23	3	7	88	21	2	23	20	1	1	3	1	27	-	-	-	1	51	190
遊覧鑑賞	9	10	3	5	13	4	2	5	1	1	1	2	1	1	6	5	37	8	56	32
遊覧鑑賞	10	12	1	3	12	5	2	5	4	1	10	-	3	-	18	6	5	37	8	56
宗教祭祀	3	1	1	-	5	1	-	1	-	-	-	1	1	-	2	-	1	-	1	7
政治祝典	3	1	1	-	3	1	-	1	-	-	-	1	1	-	2	-	1	-	1	3
政治祝典	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
政治祝典	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

注：N:記録回数 G:御製詩文に該当する植物を記録された庭園の数

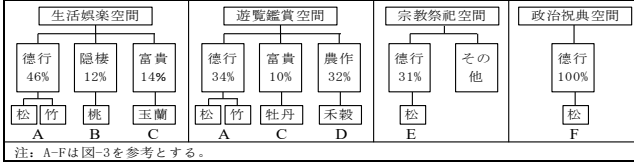


図-2 各庭園における詩文にある主な植物の構成

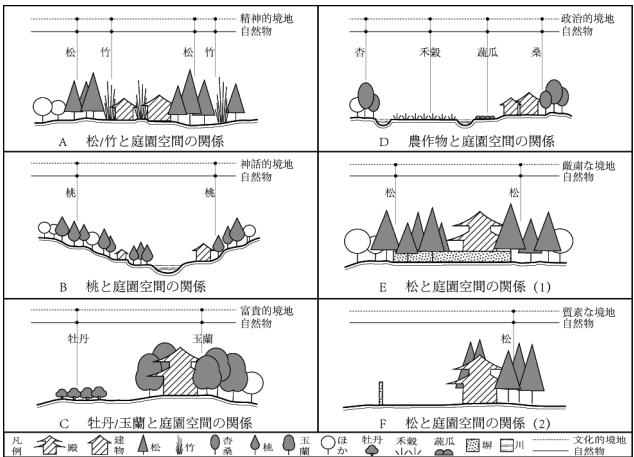


図-3 詩文からみる植物と庭園空間のイメージ

には重要な位置を占めると考えられる。「鬻鬻松陰復竹邊(竹の近くは松の木陰である)」「暫移榻向松間坐(榻を松の林に移って座ったばかり)、恰聽禽來竹裡鳴(ちょうど鳥が竹の林に鳴くのが聞こえてきた)」「月上松梢惟淨色(月が松のこずえに昇り、月の光がさえていた)、風來竹裏是清音(風が竹の林を渡り、清らかな音が生まれた)」などの詩文は松と竹の景色を同時に描写するから、松と竹は常に同じ場面に現れていることがみられる。また「怡情拒華鏡(情操を陶冶するならば、にぎやかなところから遠く離れるべきである)、悦心惟竹素(心地良いのは素朴な竹のみである)」、「誰能後凋侍三冬(誰か松のように寒冬になっても葉が落ちないか)」などの詩文から、皇帝が松と竹のような君子の「徳行」を賛美したことがわかる。これらの詩文のイメージ(図-3A)からわかるように、生活娯楽空間には、松と竹のような植物は自然的な景観のみならず、植物の花ことばを通じて園主の思想を表わし、庭園空間に深い精神的な雰囲気を与えている。

桃は21回記録され、「隠棲」を寓意する植物の主体である(図-2)。「隱逸詩人」と呼ばれる陶淵明の『桃花源記』では、「武陵出身の漁夫は谷川に沿って行くうちに、突然桃の花が咲いている林にたどり着き、桃源郷まで通じている小さな穴を発見した」と書いている。この典故から桃の木は理想郷の表現である桃源郷の代表的な植物となった。御製詩文には、「水南通曲港(流水は南に池と連なっており)、水北入廻溪(北に曲がりくねった小川に流れて入る)、絳雪侵衣艶(衣服が白い花に引き立てられて、このほか鮮やかに見える)、赤霞遶屋低(低い屋の周りは赤い花が咲いている木に囲まれている)」「循溪流而北(小川に沿って北へ向かって)、復谷環抱(山が山谷を取り囲まれている)。山桃万株(山の上に桃の木が無数に植えられ)、參錯林落間(木々の間に雑然としている)。落英繽紛(花が散り乱れる)」などの桃の花が咲いている景観を描写している詩文が多い。これらの詩文から多くの桃

の木は曲水がある山間に植えられていることがわかる。この描写は『桃花源記』にある「緣溪行(谷川に沿って行くうちに)、忽逢桃花林(突然桃の花が咲いている林にたどり着き)……芳草鮮美(香りのよい草は鮮やかで美しく)、落英繽紛(花びらが散り乱れていた)」という景観と重なっている。さらに、「漫問武陵何處(武陵がどこにいるかと問い合わせ)、且來此地移情(ここに来て体験し感じる)」という詩文から皇帝が「桃源郷」のイメージを再現する意図が読み取れる。桃の木は観賞物のみならず、理想と現実を繋げる紐帯とも言える。これらの詩文のイメージ(図-3B)からわかるように、生活娯楽空間では、園主の皇帝は桃の木のような植物を通じて、心静かで何事も自然に任せる思いを寄せ、一部の生活娯楽空間に神話的な境地をつけられる。

「富貴」を寓意する植物は1・2か所の庭園の詩文に記録される。玉蘭は1か所のみ記録されるが、それについての描写は20回と非常に多く(表-3)、ある庭園空間に対して重要な存在と言える。「后宇為含韻齋(後ろの殿は含韻齋であり)、周植玉蘭十餘本(周りに玉蘭の木が数十本植えられている)」「鑲銀傘堵白皚皚(透かし彫りの銀のような真っ白で、銀光が目まばゆい)、琢玉雕瓊已啓開(周刻された玉石のような花が満開している)」の詩文から、玉蘭が含韻齋の周りに集中的に植えられたことがわかる。含韻齋は属する庭園の正殿であり、仕様や規模が非常に大きい<sup>5)</sup>。古代文化では玉蘭は「金や玉が部屋に満ちる」の象徴とみなされた<sup>25)</sup>。これらの詩文のイメージ(図-3C)からわかるように、玉蘭は正殿と互いに引き立ち、庭園空間の雰囲気はよりいっそう華やかで立派である。

生活娯楽空間をみると、「徳行」を寓意する松と竹は広く植えられ、庭園空間が精神的な雰囲気を備えている。「富貴」を寓意する玉蘭は集中的に植えられ、建築に応じて庭園空間の華やかな雰囲気が強化される。「隠棲」を寓意する桃は、築山・水面の配置とともに、神話的な「桃源郷」の風景を再現する。

(2) 遊覧鑑賞空間

16か所の遊覧鑑賞の庭園における御製詩文には、19種の植物が173回記録されている。そのうち「徳行」(58回)と「農作」(56回)を寓意する植物の記録回数はおおよそ同じで、両者とも詩文に多く見られる。次に多いのは「富貴」(18回)であり、「隠棲」は9回と最も少ない(表-3)。

生活娯楽空間と同様に、竹(32回)と松(21回)は「徳行」を寓意する植物の主体であり(図-2)、それぞれ数十か所の庭園の詩文に記録される。松と竹は広く植えられ、庭園空間の重要な位置を占拠していると考えられる。「松棟連云俯碧瀾(高い建物の近くにある松の木は水面を直下に見おろす)、下有修篁夏幽籟(下には長い竹が薄暗い音を鳴らす)」「屋傍松竹交陰(屋の近くには松と竹の木が交錯し木陰をなす)」などの詩文から、生活娯楽空間と同様に、松と竹は頻りに組み合わせとして植えられていることがみられる。また「便娟蒼秀色(清らかで青々と見える竹)、偏茂歲寒中(あいに冬冬の厳しい寒さに生い茂っている)」「愛竹緣他君子節(竹の君子のような節操に愛する)」などの詩文を通じて、皇帝が松と竹の性格を好むことがわかる。これらの詩文のイメージ(図-3A)からわかるように、遊覧鑑賞空間には、生活娯楽空間と同様に、松と竹を多く植えることによって、自然美のみならず、皇帝が求める精神的思惟が反映されている。

「農作」を寓意する植物は遊覧鑑賞空間の詩文のみに多く記録されており、この庭園空間に属する特有な植物とみられる。そのうち禾穀は8か所の庭園の詩文に37回記録され、農作に分類した他の3種類より遙かに多い。「菜甲既勃生(野菜の若葉が生きてくる)、麦穂方飽垂(麦の実入りが充実したばかりである)」「矮屋疏籬(低い屋とすきまの多い垣根)……環植文杏(周りには杏の木を植える)……前畔小圃(前には野菜畑を開拓し)、雜蒔

蔬瓜(各種の旬の野菜とウリ)、識野田村落景象(田畑にある集落のような風景である)などの田舎生活の情景を写されている詩文から、広い田畑・野菜畑・郷土の植物はこの庭園空間に設置され、低い屋・小川と組み合わせ、山と川がある田園風景が構成されていることがみられる。また「古屋古松陰(松の木陰の下に古朴な屋があり)、毎因觀稼臨(何回も作物を観察するためきた)」「克盡農桑力(力を尽くし作物を作り)、方無饑凍虞(飢えと寒さの憂患がない)」「數畦水田趣(數畦の水田の風景があるが)、一脈感農心(農業に畏敬の念をもっている)などの詩文からみると、農地を配置するのは自然的な田園風景を造営するのみならず、農事を観察する目的もあり、政治的にも国家安定の基本である農業を重視していることがわかる。これらの詩文のイメージ(図-3 D)からわかるように、農作物は他の造園要素と組み合わせ、自然的な景観を構成している一方、皇帝の責任感を示し、一部の遊覧鑑賞空間に政治的な意味もつけられ、一般的な遊覧鑑賞空間と区別され、円明園の離宮御園の特徴をいかしている。

遊覧鑑賞空間には、生活娯楽空間と同様に、「富貴」を寓意する植物は1・2か所に植えられ、ある庭園空間に対して重要な存在と言える。牡丹は「富貴」を寓意する植物の主体であり、その描写は10回と非常に多い。「殿以香楠為材(殿はクスノキで作られ)、覆二色瓦(二色の琉璃瓦がかぶせられており)、煥若金碧(金色や青緑色に光り輝く)。前植牡丹數百本(前に牡丹が数百植えられている)」の詩文から、牡丹は琉璃瓦がかぶせられている殿の前に植えられていることがわかる。清代には、琉璃瓦は皇室のみが用い、社会的な地位の象徴とみなされる<sup>26)</sup>。円明園には、自然的な風景を調和するため、建物の多くは灰瓦で覆われ、琉璃瓦が使用された建物は非常に少なく、一般的な建物よりいっそう高貴である<sup>27)</sup>。これらの詩文のイメージ(図-3 C)からわかるように、「花の王様」と呼ばれる牡丹はこのような殿の前に植えられ、一部の遊覧鑑賞空間がさらに豪華に見える。

遊覧鑑賞空間をみると、「德行」を寓意する松・竹は広く植えられ、庭園空間に精神的な雰囲気立ちこめている。「農作」を寓意する植物は庭園空間に独特な特徴を与え、政治的な境地をもっている。「富貴」を寓意する牡丹は集中的に植えられ、華麗な庭園空間表現をさらに強めている。

### (3) 宗教祭祀空間

円明園には宗教祭祀の庭園は5か所のみであり、それについての詩文も少ない。11種の植物は全部で16回のみ記録されている(表-3)。花ことばがある7種の植物は、松の記録回数が3回である以外、他はすべて1回のみである。御製詩文には「拏空松柏与天参(松柏が空高くそそり立っている)」「松色翠密(松の木は青々かつこんもりとした)、与紅牆相映(赤い塀と互いに引き立て合っている)」「周垣喬松偃盖(周りの垣は高い松の木に覆かれている)、郁翠干霄(青々と茂ってそそり立っている)、望之起敬起愛(それを見ると敬意と好感を生み出す)」という詩句は松の景観を描写している。この詩文からみると、松を植えることで力強くそびえ立つ青い姿を利用し、厳かで恭しい雰囲気を際立たせていることがわかる。また、御製詩文にはその他の植物の記録回数は7回と半数を占めている。詩文のイメージ(図-3 E)からわかるように、宗教祭祀空間において植物景観を造営する目的は、植物の自然的な様相を利用し、宗教祭祀空間の雰囲気と調和させる。

### (4) 政治祝典空間

政治祝典の庭園は2か所のみであり、御製詩文には松の1回の記録のみがある(表-3)。「園南出入賢良門内有正街(庭園の南に出入賢良門を通して朝政を行う正殿がある)、不雕不絵(彩色を施さないで)、得松軒茅殿意(松の木がある質素な殿のイメージを得る)……前庭虛敞(前庭は広々としている)」の詩句によって、前庭は広く、正殿の近くに松の木を植えていることがわかる。こ

の2か所の庭園は朝会や戸外祝典を行うと外国使者を接見する場所である<sup>5)</sup>ため、広い活動空間が必要であり、多く植物を植えるのは相応しくない。詩文のイメージ(図-3 F)からわかるように、政治祝典空間には植物景観は庭園空間造営上の中心ではない。

### (5) まとめ

以上、4種類の庭園空間において、植物景観の造営が以通ったところも異なっているところもあり、花ことばによって植物の庭園空間への役割と影響が異なっているということがわかる。生活娯楽空間と遊覧鑑賞空間には植物種類が多く、松と竹が広く植えられ、庭園空間に精神的な境地を付与している。玉蘭と牡丹はそれぞれ一部の生活娯楽空間と遊覧鑑賞空間に集中的に植えられ、建築と互いに引き立て合い、華麗な庭園空間の境地を強調している。また、生活娯楽空間には、桃を通じて、築山・水面の配置と合わせもち、「桃源郷」のイメージが再現され、一部の空間に神話的な境地をつけられている。遊覧鑑賞空間には、多くの農作物を植えることによって、一部の遊覧鑑賞空間が政治的な境地を備え、円明園の離宮御園の特徴をいかしている。宗教祭祀空間において、植物の自然的な様相が利用され、宗教祭祀空間の雰囲気と調和している。政治祝典空間には植物の種類が最も少なく、活動場所の性質によって植物景観は庭園空間造営上の中心としない。

### 5. 終わりに

本研究は清代雍正帝と乾隆帝の円明園に関する詩文に記載されている植物の種類と記録回数を整理し、植物の明清時代の花ことばをまとめた。また庭園空間の機能と結びつけ、植物の花ことばの観点から各庭園空間の特徴を分析し考察した上で、植物の役割や影響を明らかにした。生活娯楽空間と遊覧鑑賞空間は豊富な植物種類をもち、「德行」を寓意する松と竹を介して庭園空間に精神的な雰囲気を豊かにし、「富貴」を寓意する玉蘭と牡丹を介して華麗な印象を強く与えることがみられる。また、「隠棲」を寓意する桃は生活娯楽空間に神話的な境地をつけ、「農作」を寓意する農作物は遊覧鑑賞空間に政治的な境地をつけることがそれぞれわかる。一方、宗教祭祀空間と政治祝典空間は比較的に単一な植物種類をもち、植物の花ことばより植物の自然的な美をいっそう注目していることもわかる。全体的に見ると、植物の花ことばにより、円明園の庭園空間は目に見える自然美を超え、精神や思想などに開する目に見えない文化的な境地も体験できると考える。

### 補注および参考文献

- 注1: 御製詩文には、表、稲が多数現れているが「禾黍」や「禾」と述べていることもある。これらの植物は全て禾本科の植物であり、本研究では「禾穀」と総称する。「蔬」[菜園]「瓜圃」も詩文に多く述べられているが、野菜と瓜の種類はすべて明示していないため、本研究では「蔬圃」と総称する。
- 注2: 明清時代には、柳・蓮・紫藤は花ことばであるが、庭園空間造営上はその花ことばの意味不明瞭あるいは弱く考え、柳は生命力が強く、春の象徴であるが、最も著しい花ことばは「友情」[別離]「引き留める」という文化的な寓意であり、その寓意は遊覧鑑賞空間の影響が弱く、柳を庭園空間に植えているのは自然な姿を觀賞するためであると考え、蓮は複数の花ことばがあり、最も著しいのは「仏教の智慧」「愛情」という文化的な寓意であり、円明園に水面が多くあるから、蓮は遊覧鑑賞空間に植えている目的は主に觀賞であると考え、紫藤は生命力が強くを象徴するが、その花ことばは文化的に弱く。
- 注3: 現在の資料から清代の円明園における全部の植物種と植栽配置は不明であり、植栽配置の観点から庭園空間を分析するのは不可能と思われる。そのため、本研究は植栽配置にかかわらず、植物の花ことばの観点から造営思想や手法の研究を行い、花ことばの文化的および文化意味の弱く、植物種を分析や考察の中心としない。
- 程 杰 (2014): 論中国花卉文化の祭祀状況、発展進程、歴史背景、[園学] 01, 111-128
  - [宋] 胡次焱: 梅杏文苑、影印文淵閣四庫全書本、卷一
  - 楊 博 (2015): 探析中式園林的植物配置之藝術美、現代裝飾(理論) 08, 233-234
  - 楊松飛 (2009): 論中國古典園林植物配置的多元審美意識、浙江林学院學報 02, 262-265
  - 円明園管理处 (2010): 円明園百景図志、中国大百科全書出版社
  - 郭盛恒 (2009): 遠逝の神皇: 円明園建園園林研究と保護、上海科學技術出版社、9pp
  - 張思傑ら (2000): 西方人眼中的「明」朝: 對外經濟貿易大學出版社、26pp
  - 趙光華 (1986): 円明園及其園林藝術分期考、[園学] 04, 16-21
  - 趙 君ら (2009): 円明園園址公園植物景觀現狀分析及整治建議、林業工程學報(05), 14-19
  - 鐘 原ら (2010): 円明園植物資源與景觀現狀調查研究、北京林業大學學報(1), 144-152
  - 楊 馨ら (2007): 円明園九州景区山石、水景、植物景觀的成因及修復、中國公園 04, 2-8
  - 吳哲馨ら (2010): 円明園植物景觀現狀及修復、[園学] 11, 116-124
  - 趙 君 (2009): 円明園遊覽植物景觀研究、北京林業大學、2009
  - 張思傑 (1989): 円明園遊覽植物景觀初探、古園園林技術(3), 12-16
  - 楊 平 (2010): 乾隆御製詩文与円明園園林特色、農業科技与信息(6), 14-17
  - 何重義 (2010): 円明園園林藝術、中国大百科全書出版社、97pp
  - 張世平ら (2016): 中国園林史 [円明園四十景圖] における庭園建築配置からみた庭園空間の特徴とランドスケープ研究、日本造園学会誌 79(5), 409-412
  - 章俊華 (2007): 中国園林園における植物の花ことばの庭園空間の表現と特徴、環境情報科学論文集 21, 201-206
  - 朱雲霞ら (1983): 清 五朝《御製集》中の円明園詩: 円明園 02, 55-72
  - 朱雲霞ら (1984): 清 五朝《御製集》中の円明園詩統一: 円明園 03, 41-84
  - 朱雲霞ら (1986): 清 五朝《御製集》中の円明園詩統一: 円明園 04, 61-93
  - 朱雲霞ら (1992): 清 五朝《御製集》中の円明園詩統一補: 円明園 05, 185-205
  - 楊光芬 (2005): 花卉文化与園林觀賞、中國農藝出版社
  - 清 陳夢元 (1888): 花鏡、1888
  - 劉芳蘭 (2009): 中国王朝文化及其園林应用浅析、北京林業大學學報(3), 55-59
  - 李全慶 (1987): 中国古建築形制考略、中國建築工業出版社
  - 郭盛恒 (2007): 乾隆御製詩文、浙江古籍出版社、124pp